

1. 多様な学びと子ども中心の場の創造力

〈実践交流のまとめ〉

奥地圭子(東京シュール)

この分科会では、実際の実践を出しあう、参加者にとって、実際がわかる、ということのポイントにしました。それぞれの多様な学びを創り出している団体は、実際、日々どのような実践を行っているのでしょうか。また、その実践は、なぜ行い、どのような意義を持っているのでしょうか。

それらを知った上で、相互に、あるいは会場の皆さんと交流することにより、子ども中心の場が持つ創造力について深め合いたいと考えました。

発表いただいた団体と人物は下記のとおりです。進行の方法は、各団体発表20分、その団体への質疑10分、それを3回行い、その後の30分を会場とのフリーディスカッションといたしました。

①箕面こどもの森学園

大阪府箕面市で認定NPO法人コクレオの森が運営する学園で、子ども一人ひとりの個性を尊重し、民主的に生きる市民を育むことを目的としたオルタナティブスクールです。フレネ教育やイエナプラン教育をベースに、ESDにも取り組み、小中学生約60名が学んでいます。発表者は、小学部担当のスタッフ、矢吹卓也さんでした。

②デモクラティックスクール「まっくろくろすけ」

兵庫県市川町で活躍するオルタナティブスクールで、子どもが主体となりおとなと一緒に自治スクールを運営しています。子どもの自由が尊重され、自分の好きなことを学び、自分を育てるのは自分という考えのもと、定員40名の学園です。発表者は団体代表で、創設者でもある黒田喜美さんでした。

③東京シュール

不登校の激増するさなかの1980年代半ば、学校外の居場所・学び場として東京都北区に開設。4つのスペースとホームシュール部門をもつNPO法人が

運営するフリースクールです。「子どもがつくる・子どもとつくる」を理念とし、一人ひとりの自由ややりたいことの応援をミーティングでの話し合いを軸にしながら取り組んでいます。発表者は、王子シュール中高等部のスタッフの佐藤信一さんでした。

④ディスカッション

3つの発表団体とも、非常に面白く、子どもが主体的に活動し、個々の尊重と、共同でさまざまなことに取り組みながら成長していく具体例が交流され、子ども中心の場の創造力とその可能性を参加者の皆さんが感じられたと思います。しかし、経済面、スタッフ養成、保護者との関係、学校・行政との関係、地域社会との関係等質問や意見交換の中で、未来にひらいていくための課題もいろいろ考えさせられた時間となりました。今後も、このような交流を重ねていけたらと感じました。

1) 箕面こどもの森学園の活動から

矢吹卓也

箕面こどもの森学園とは、子ども一人ひとりの個性を尊重し、民主的に生きる市民を育むことを目的としたオルタナティブスクール(小中学校)です。フレネ教育やイエナプラン教育をベースに、ESD(持続可能な未来をつくる教育)を行っています。3学年ごとの異学年混合クラスで、現在小1～中3までで約60名の子どもたちが学んでいます。今回は、子ども中心の場の創造力ということで、学校生活のことについて話し合う「集会」と自分の好きなことややりたいことができる「プロジェクト」について紹介します。

こどもの森では、学校自体が民主的な場であるために、大人だけで物事を決めず、学校のルールについては、集会の場で決めています。話し合いたい議題を誰でも出せるように、集会のボードが用意されており、そこには「言いたいこと、聞きたいこと」「やりたいこと」「ともだちのいいところ」「困っていること」が書き込めます。

集会では「勝負なし法」というものを参考に、議題についてお互いを感じていくことを聴き合い、そこから誰もが納得できるものを見つけるために、案出しをします。低学年クラスでの「マスクが落ちていて嫌だ」という議題の時に

は「マスクが落ちているのは衛生的にどうか」という意見や「暑いから外してしまう」「スポーツするときは、外さないとしんどい」という意見が出て、マスクの取り扱いについてのルールを決めました。

また、全校集会での「校庭の遊び道具が片付けられていない問題」の時には、現在の道具入れにうまく入らないということが分かり、新しく物置をつくるプロジェクトチームが立ち上がり、プロジェクトの時間を使って新しい物置が作られました。集会では、このように生活の中で起こる出来事を取り上げ、対話を通して、より良い未来を模索し、自分たちの力で創ることを体験しています。

「プロジェクト」という時間では、自分の好きなことややりたいことができます。木工で流行りの刀づくりや、工作でお家づくり、サッカー、クッキングなど、多様なニーズにこたえられる環境をつくっています。

プロジェクトを始めるとき、子どもたちは、まず自分がやりたいことを考えます。自分の「興味関心の種」を見つけたら、次にプロジェクトシートを使って、どんなプロジェクトにしたいか図示したり、必要なものをまとめるなど「発想の枝」を伸ばしていきます。そこからプロジェクトに取り組み、完成した「作品」を展示したり、遊んだりします。

プロジェクトでは、このように自分を表現し、大切にできる環境を整えています。自分を表現し、受けとめてもらえる環境で、人はもともと持っている創造力を発揮できます。そして「身の回りのことを自分たちでつくっていけるんだ」という実感が、持続可能な社会の担い手である民主的な市民を育てていくことに繋がっていると感じます。

2) デモクラティックスクールまっくろくろすけの活動から

黒田喜美

兵庫県の姫路市から北に30キロほど行ったところにあり、7歳から16歳まで30人ほどが通っています。「デモクラティックスクール」のだいたい味である子ども自身が行う「直接民主制」による自治を紹介します。

基本的人権に基づいて自由に学び過ごすスタイルの学校です。全体に影響することなどを子どもとスタッフが話し合っ決めていきます。そのため話し合いをどんなふうにしていくかを工夫して様々な種類を設けています。設定自身も子どもが決めるので、来ている子によって変わってきました。現在は6種

類あります。特別な時以外は出席したい人と関係のある人が参加します。

「朝の会」は毎朝開かれます。主にその日のことについて打ち合わせするためのものです。

「終わりの会」は集団生活の要となるものです。今後の予定・困ったこと・ルール制定などが議題です。以前は参加する子が何人か必ずいました。去年は参加者がいない時もあり、相談したいのに相手がいない…という状況も。そこで一人一人にミーティングについてどう思うか聞き取りを行ったところ、全員がミーティングは必要、相談に乗ってくれる子どもがいらないとならない、おとなにだけ頼みたいわけではないと考えていました。そこで3人ずつ順番に係りを行うことになりました。通っている年数の長い人から3グループに分けました。長く来ている人、中間くらいの人、新しい人のグループから順番に選ばれた3人とおとなひとりの合わせて4人が司会、書記、意見を考える係りとなることに決まりました。先輩・後輩というものはないのですが、長く来ている子たちは新しい子たちに必要なことを教え、サポートしています。日常でもたくさん見られる姿です。

今まで一度も司会をしたことがなかった子も意識をして全体を理解するようになりました。係を怖がっていた子もやってみると案外面白いという子もいました。新しい子は司会などしなくても、聞いてもらってまずはミーティングに慣れてもらうことに重きを置いています。

「終わりの会」で全員に話さないとならないことができると、緊急のこと以外はいくつか集めておいて「全員招集」が行われます。主に注意・報告(新しいルールなど)と特別に全員の意見を聞きたいことなどです。自由時間と全員で話すことのバランスをとっています。ここに通いたくて来ているので、全員招集には各自やっていたことをすぐに中断して集まります。前の学校でやっていることを中断できないと言われていた子もです。

「週ミーティング」では担当の子たちが細かい案を作ったり、イベントや総会の準備などをしたりします。

「大会議」と「総会」という学校の年間の基礎を作るための会議があります。まず、来年の設定には全員の意見が反映されるようにアンケートが行われます。子ども代表の子たちがそれを集約して、次年度案を作ります。自分たちと過ごすおとなもここで選ばれます。どの人に来てほしいか、来てほしくないか等希望があれば書きます。おとなに改善してほしい点も書かれるので、私たちおと